

令和7年度青森県立保健大学

一般選抜前期日程

社会福祉学科

小論文試験問題

10:00～11:30 (90分)

〈注意事項〉

- 1 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないでください。
- 2 この問題冊子には、問題用紙が3ページあります。
- 3 落丁・乱丁がある場合は、手を挙げて試験監督者に知らせてください。
- 4 解答用紙には、下記の記入例により **あなたの名字の頭2文字及び受験番号を忘れず**に記入してください。
- 5 問題冊子及び下書用紙は持ち帰ってください。

〈解答用紙への記入例〉

(例1)

頭2文字	ス	ズ	(鈴木:スズキ)
------	---	---	----------

(例2)

頭2文字	ザ	イ	(財前:ザイゼン)
------	---	---	-----------

(例3)

頭2文字	キ	ツ	(吉川:キツカワ)
------	---	---	-----------

受験番号	3	1	1	0	0	1
------	---	---	---	---	---	---

令和7年度青森県立保健大学一般選抜（前期日程）試験問題

社会福祉学科

問題 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（*には注釈があります。）

日常のカニバリズム

爛漫と花をつけた桜並木の下を自転車で走っていく。つがいの鴨は川面を滑るように進み、白鷺が中洲に舞い降りる。去年と変わらない春の光景。ただ違うのは、土手にシートを広げて憩う花見客の姿がないことだ。花や鳥たちにとっては変わらぬ春。人にとっては不穏な春。どこまでも続く花の下を走り抜けながら、それぞれの生物が生きている環世界*の違いをあらためて思う。同じ時空間を共有していながら、棲んでいる世界は異なっている。

でもいま、私たちが恐れているのは異なる環世界の間を往き来するものだ。動物から人へ、人から人へ。生物の間を往き来し、感染し、影響を及ぼすもの。

かつてレヴィ＝ストロースは狂牛病（牛海綿状脳症：BSE）について、人間が作りだした共食いの帰結として論じた。ウシの死骸の一部を飼料に混ぜて家畜に食べさせたことがこの病の蔓延を招き、病んだウシの肉を食べることで人間も死の危険に晒される。彼が指摘したのは、ウシがウシを食うことだけではなく、人がウシを食べることもまた、動物同士の共食いという一種のカニバリズムにほかならないということだった。そこには「食べる」という抜き差しならない関係を通して他の存在とつながりあい、相手の一部を自己の中に摂り入れ、それによって危機的な影響を被ってしまうという、つながりと同化の負の側面が示されている。

だが、あえてカニバリズムというまでもなく、私たちは常にそうした危うさをはらんだ自他のつながりと融合を生きているのかもしれない。無数の物質を摂りこむことで「私」が形成されると同時に、「私」から出ていく物質には私の一部が含まれている。そのようにして、私は無数の他からなるとともに、無数の他の中に拡散している。自己でもあり他でもある物質^{サブスタンス}は、そうしていくつもの環世界の間をめぐり流れる。

食べること、触れあうこと、世話すること、分かちあうこと。そうした日常的な行為を通して、私と人間ならざるものを含む他者たちの断片は延々と受け渡しされ、摂取され、放出され、拡散し、循環していく。

南アジアの村で、あるいはメラネシアの島で、人類学者たちはそうした相互浸透的で拡散的な「人」のありように出会ってきた。水や食物、血液や母乳、供物や贈り物。それらの内に含まれ、やりとりを通して人びとの間を受け渡されていくものを、人類学者は「サブスタンス＝コード」と呼んだ。それは物質としてのサブスタンスと、人のありようを方向づけ、自己と他者、人間と自然の関係を秩序づける規*との一体性をあらわす概念である。人類学的な議論において、このように他者のサブスタンス＝コードを摂りこむことで生成するとともに変容し、自己の一部を放出することでつながりの中に拡散してゆくような人のあり方は、明確な境界をもち、それ以上分けられない存在としての「個人

(individual)」と対比されるべき①「分人 (dividual person)」と呼ばれ、一部の非西洋社会における独特な人間像を表すものとされてきた。

「サブスタンス=コード」としてのウイルス

ところで、生物学者の中屋敷均によれば、ウイルスなるものは一般に、キャプシドというタンパク質の集合体が、固有の遺伝情報からなる核酸を包みこむという基本構造をもつという。中屋敷はまた、親から子へという鉛直方向における遺伝子の伝達とは異なり、同時代に存在する他種の生物の間で遺伝子がやりとりされるという、遺伝子の「水平移行」を媒介するウイルスの働きについて述べている。(中略)

コード化された情報を内包し、宿主の間を水平方向に移動していく物質。とすれば②ウイルスは、いわば文字通りの「サブスタンス=コード」だといえるかもしれない。

ただしもちろん、それは人類学者によって長らく議論されてきたサブスタンス=コードと同じではない。人類学的な議論において、「コード」という語は符号化された情報というよりも人としての規を意味しており、ゆえに人類学的なサブスタンス=コードの概念には、社会関係や価値観やモラルなどが含意されている。他方で、ウイルスに含まれるコードは本来的に、社会的なものでも倫理的なものでもない。

その一方で、ウイルスを含む生物学的なサブスタンス=コードの流通は、社会化されることがありうる。たとえば、あるウイルスの感染経路をたどろうとするとき、それはウイルスが伝播していく宿主と宿主の関係性をたどり、明らかにしていくことにほかならない。そのつながりは次々に枝分かれし、伸展し、拡散していく。このとき、宿主である「私」の微小な断片が接触を通して社会関係の網の目の中に分散していくとともに、無数の他者たちの断片が知らぬ間に「私」の中に混入していることが、想像でも比喻でもなく、端的な事実として知らしめられる。

流通を制御する

そうして気づかされるのは、透過的で拡散的な「分人」としての人が、遠い異文化に生きる人びとの想像の産物であるのではなく、確固たる境界をもち、これ以上分けることができない存在としての「個人」こそが、たぶん幻想なのだということだ。

サブスタンス=コードや「分人」などの概念を提唱した人類学者たちは、南アジア社会において、危険をはらんだ「他者」との接触や物のやりとりがもたらすかもしれない影響から自分の身を守るために、人びとが編みだした規範やふるまいの例を報告している。

相手と触れあわない、共食しない、同じ食器を使わない。あるいはまた、相手と適切な距離をとり、互いの中に一時的な境界を引く。

他者との接触は潜在的な畏れをはらみ、接触にともなうサブスタンス=コードのやりとりには常に危険が潜んでいる。そして、そうした危険を回避するためにつながりを断ち切ろうとする方法は、いつもどこか似通っている。

(中略)

ただし今や、そのために用いられるのは洗練されたテクノロジーだ。スマートフォンの位置情報や検索履歴の統計データを用いたクラスター発生エリアの推定、携帯電話や IC カードのデータを用いた感染者の移動経路の特定、スマートフォンのアプリを用いた利用

者同士の接触の記録と感染者との接触の通知。

これらのことを可能にしているのは、普段はさほど意識されることもないスマートで便利な情報ネットワークだ。ウイルスという生物学的なサブスタンス＝コードの流通を把握し、制御するためにインフラ化した情報のネットワークが用いられ、それを補完するために新たな技術が開発されていく。人びとの移動経路が追跡され、互いの接触が記録され、感染の軌跡が可視化される。そうやって部分的にせよ露わにされるのは、皮肉にも「個人情報」という名で呼ばれる私たちの痕跡、私たちの断片、私たちのつながりと混交と拡散のありさまである。

たぶん individual など、これまでに一度も存在したことはなかったのだ。

だが、人間によるそうした把握や制御の試みをよそに、ウイルスは人と人の間を、異なる環世界に生きる生物たちの間をめぐり流れる。そのことが可能であるのは、まずもって異なる存在である〈私ーたち〉の間に、少なくとも授受の関係が成り立つような共通項があるからだ。くわえて、ウイルスの迅速な流通と広範な拡散を可能としているのは、人間の作りだした社会的ネットワークの存在にほかならない。

だからこそも、人間性や社会性とは本来的に無関係なサブスタンス＝コードとして、異なる存在の間をめぐり流れるウイルスの流通を見つめる視座と、そうした流通がどのようなネットワークによって媒介されており、それに対処するためにいかなる社会的・政治的な方法が編みだされ、テクノロジーとして実装され、普及することで社会の常態を変えていくのかを注視する視座の両方が必要であると思われる。③生物学的なサブスタンス＝コードの流通と、社会的かつ政治的なネットワークのもつれあいを見定めるために。

(出典：石井美保著『センザンコウの警告』，村上陽一郎編『コロナ後の世界を生きる』，株式会社岩波書店，2020年，pp.219-225より抜粋。ただし，出題の都合上，縦書きの原文を横書きにし，文章の一部を省略・改変している)

*環世界 各生物には生活主体として知覚し，働きかける固有の環境がある，ということ。全ての種は自分が持っている知覚によってだけ世界を理解していることから，世界は客観的な環境ではなく，個々の種が構築する独自の世界である，というドイツの生物学者ヤーコブ・フォン・ユクスキュルの考え。

*規 標準。おきて。さだめ。

問1 下線部①とは何か。本文に沿って80字以上100字以内で説明しなさい。

問2 下線部②について，共通点を表す単語を1つ，相違点を表す異なる意味をもつ単語を5つ，本文中から抜き出して書きなさい。

問3 下線部③とはどのようなことか。新型コロナウイルス感染症に関わる経験をもとに，600字以上800字以内で具体的に述べなさい。